



令和7年度 兵庫県立大学 生涯学習公開講座

## 【阪神・淡路大震災の教訓とは何か】

日 時： 令和8年1月17日（土）13:00～14:30  
受講者数： 37名（対面 29名、オンライン 8名）  
会 場： 兵庫県立大学神戸防災キャンパス大教室  
講 師： 阪本真由美 先生（減災復興政策研究科 教授）

### ○テーマ・概要

6,434人が犠牲となった阪神・淡路大震災。

災害対策の失敗はどこにあったのか。

この30年間で対策は進化したのか。次なる南海トラフ地震の備えはできているのか。

みなさんと考えます。

### ○内 容

最初に、講師から「阪神・淡路大震災の教訓とは何か」をテーマに報告が行われた。阪神・淡路大震災は「想定」を超える被害だった。地震後に大規模な火災が発生・拡大したものの、断水で消火活動は困難だった。行政の被害も大きく、避難所運営や物資供給が十分に機能しない状況が生じた。全国からさまざまな支援が提供されたが、連携体制は十分に整備されていなかった。そのような状況において、被災した人々の命を守るうえで、地域の力は重要な役割を果たすことが認識された。被害は地震の揺れによるものにとどまらず、避難生活などの生活環境の悪化により災害関連死が発生した。復興には長い時間がかかり、減災復興政策を事前に整備することの重要性が浮き彫りになった。阪神・淡路大震災をきっかけに災害対応体制整備は進んだ。けれども、能登半島地震の経験からは、災害後の生活環境の改善や官民連携の強化は依然として課題であることが示された。誰一人取り残さないためにも、さらなる支援体制の拡充は必須である。

その後、減災復興政策研究科の学生（山口恭平・川原耕一・福田敬正）を交えて意見交換が行われた。会場からは「なぜ避難者情報把握の仕組みはすぐに構築されないのか」「行政や住民からどのように役割分担すればよいか」等の質問が出され、活発な議論が展開された。